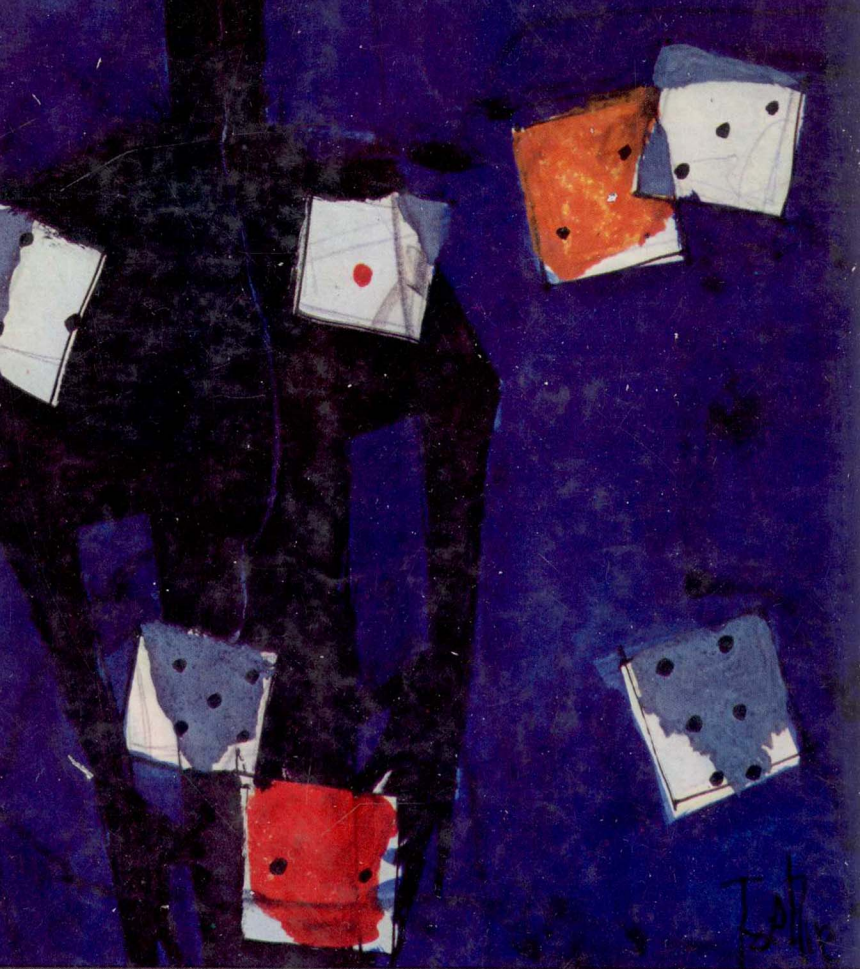




双葉新書

総長への道

藤原審爾

総長への道

(検印廃止)

370円

昭和46年3月10日 初版発行

著 者 藤 原 審 爾

東京都杉並区天沼2の38の4

発行者 瀬 川 雄 章

発行所 株式会社 双 葉 社

東京都新宿区神楽坂1の8

(郵便番号 162)

電話東京 (268) 5111(代表)

振替東京 117299

印刷所 慶 昌 堂 印 刷 株式会社

東京都文京区水道2の4の26

製本所 株式会社 川 島 製 本 所

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします

0293—600046—7336

総
長
へ
の
道

残心之章

藤
原
審
爾



双葉新書 FUTABASHA

目次

星祭 5

一宿一飯 59

おとしまえ 123

成仏 144

博多夜霧 186

信次郎盃をもらう

221

装幀
田代
光

星 祭

昼すぎ、はげしい雨と雷鳴が、一っ時つづいて上ると、からりと晴れ、目にしみるような青空になった。

梅雨があけたのである。

七月六日は七夕前夜で、つい近くの遠州八幡神社裏の、大木の東助の俵屋の二階で、例年通り賭場がひらかれる。

ちやちな小博打だが、このところ鬱とうしい雨つづきで、家業の手伝いをやらされ、すっかり滅入っていた信次郎は、広い台所で家族奉公人と一緒に夕飯を、さっとすませると、すぐに店を飛びだした。

銀河泉

という看板のあがった、酒くさい店の中から、薄暮れた表に出ると、夕風は涼しく甘かった。母親の澤乃のとがった呼び声が、束の間、家の奥から聞えてきた。

「信次郎、信次郎」

悪いあそびにとり憑かれた息子を案じる切ないものが、その呼び声にもって、市はずれの閑かな夕ぐれの街道へひろがった。

わが子の身を案じる母親の心のほどが、信次郎へとどいたが、毎度のことである。

信次郎はあわてて急ぎ足になり、大きな構えのわが家の前から逃げだした。

信次郎は大きな軀だが、年はまだ廿歳、白い緋の着物が、その紅顔によく似合っている。

大木の東助は杜氏あがりの博徒で、若いころ信次郎の家で働いていた。その縁で、信次郎は、大木の賭場では、よい顔なのである。

神社裏の古びた料理旅館の俵屋は、左の頬に凄いい刀傷のある乱暴者の勢五郎がとりしきっている。

神社の境内を抜け、俵屋の二階へ信次郎があがった時には、客はまだ五、六人で、二つ組に別れて、めいめい花札さいころで遊んでいた。一ト組の二人連れのほうは、新顔で、遊び人の垢が五体にしみこんでいる。

二階は十帖八帖の二部屋で、賭場の支度が出来あがっている十帖と、こちらの八帖の間には、簾が吊ってある。

信次郎は八帖のほうの中窓のところで、立て膝をしてもたれかかり、簾ごしにその新顔を眺めながら、

「若旦那、いっちゃうやりましたう」

と将棋盤をもってきた鉄三へ、

「あの二人は、名のある連中か」

と小声で聞いた。ここらあたりの連中とちがい、きびきびしていて油断がない。

「さあね、明日の七夕祭にきた的屋じゃねえのかなあ。ここに泊ってるんだから」

鉄三は信次郎の分まで駒を並べ、

「ようござんすね、若旦那、一升ですよ」

と飛車先をついてきた。もう鉄三は四十すぎで、二十年以上将棋をやっているのだが、棒銀と中飛車しかやらない。下手の横好きなのである。

その将棋が二回終わったとき、勢五郎たちが金箱を抱えてあらわれ、それから間もなく本引勝負の開帳になった。客もおいおいに集まり、十数人にふえ、場はにぎやかになってきた。

このところ信次郎はついてない。たちまち卅円ばかりやられて、つきを変える気で、席を立ち、八帖のほうへ出てきた。胴の文四郎の業は馴染もよいところだから、繰りの見当がつくので、たいてい頂きなのだが、われながらいやになるほど、信次郎は迷って気が定まらない。

中窓ぎわで寝ころび、信次郎が背腰を伸していると、すぐ鉄三が枕許へやってきて、

「若旦那、杉野屋のお嬢さんが戻ってきたそうですよ」

と囁いた。

材木問屋の杉野屋は信次郎の家とは、親しい仲の遠縁で、長女の京子と信次郎は、子供の頃から許嫁だった。

それを去年死んだ父が、俄かに信次郎の兄の義一郎の嫁にすると言いだした。それが因で、信次郎はぐれだし、京子は一昨年^{おとし}とうとう家出してしまった。

つい一ト月ほど前、新橋のカフェでよく似た女が働いているという噂さを、信次郎は耳にしたばかりだった。

「連れもどされたのか」

「独りで戻ってきたそうなんです」

「これか」

信次郎は腹の上へ掌で半円を描いた。

「それでもねえようですよ」

鉄三が手を振った時、二人組の一人のほうが、

「ひどくむしむしするね」

と八帖へ入ってきた。

信次郎が身を起すと、その男は中窓から胸をのりだし、胸へ夜風を入れながら、庇の簾をあげ、

「あの灯が駅ですかい、こっちのほうの灯は」

と鉄三へたずねだした。

信次郎は、ふっと、

変んな野郎だなあ

と思った。

仕切りの簾のむこうの賭場では、その男の連れがもう千円ほどさらっており、勢五郎がいやな顔になっている。

「入ります」

という文四郎の声にも、こころなし気合がかかってない。それでいてなんとなく殺気立っている。

一ト荒れきそうな模様なのだが、それを気にもとめていない風情のところ、信次郎の勘にかちんときたのである。

へなげ、帰ってきたンだろう、京ちゃんは？

ほとんど同時に、勢五郎のものすごい唸鳴り声が聞え、信次郎は跳ね起きた。

「野郎、掌の中の札をみせろいっ」

「千や二千の負けで、因縁つける気かよ、ケチな兄さんだぜ」

「野郎を逃がすなっ」

うわっと客が総立ちになった。

その二人組は、こういう騒ぎには馴れていた。さっと立ちあがりさま、賭場の天井の電灯へ男は煙草盆を投げつけた。傘と電球が割れて、あたりへ四散し、灰が灯の消えた中で舞う。それと同時に信次郎の横にいた相棒が八帖のほうの灯を七首で叩き割った。

前もってしめし合せていたように、二人はどっと廊下へ飛びだし、廊下の灯も叩き割った。ひらりと窓から屋根へとび、そこで左右に分かれて、あっという間に姿をくらました。

真っ暗な部屋の中で、勢五郎はたちまち電灯の破片を踏みつけ、うぬっと棒立ちになった。それでも四、五人の若い者が、

「待ちやがれっ」

と叫びながら屋根へ躍り出てあとを追いはじめた。

勢五郎は闇の中でわめき立てている。

「駅だ、駅前の野村の兄弟へ電話しろ。イカサマ野郎をひっ捕えろ。簀巻きにして海へ叩き込むんだ。ナメやがって、畜生っ。生かして市から出すなっ」

こういう騒ぎは、年に一度あるかなしたが、その実、ごくあやふやなもので、時にはただの言いがかりの場合もある。

掌の札をみせれば、札を仕掛け札とすりかえられるので、身のあかしなど立てられるものではない

い。こんな様子になれば、ただもう逃げの一手である。

客はもとよりそのことを百も承知だが、イカサマだと騒げば、すった銭が戻ってくるかもしれないから、一人のこらず、イカサマだと騒ぎたてる。それで、勢五郎たちは調子づく。そうでなくとも調子づきやすい連中だから、たちまち火の玉のようになった。

電話で市から出る道という道を、卅分ばかりのうちにふさぎ、子分たちをかき集め、二人組をさがして、市中を駆けまわりはじめた。

もう十時をすぎた頃で、いつもなら信次郎はそろそろ帰らなければならない。家では母親が信次郎が帰るまで、寝もせず待っているのである。

その夜は、しかし、俵屋へ駆けつけたごま塩頭の東助に、

「顔をみた者が少ねえンだ。若旦那も今夜は力を貸して下さい」

と頼まれたり、目のあたりの騒ぎで、すっかり昂ぶっており、信次郎は帰る気をまるで忘れてしまった。信次郎は、中学生の頃から暴れン坊で、騒動の先頭に立つのが好きなのである。荒磯の三造という東助の弟分をはじめ五、六人の荒磯の身内と一緒に、信次郎は夜の町を駆けめぐりだした。

荒磯の三造は、港の仲仕上りで、すぐ頭にくるたちだから、暴れだすと手がつけられない。今夜も喧嘩支度で腰に一本ぶちこみ、えらい勢いで俵屋へやってきたのだが、一時間ばかりも町を駆けまわると、次第に気が抜け機嫌がわるくなりだした。根気というものが無いのである。

そのうち通りがかりに見つけた居酒屋で、三造は、

「一杯やって景気づけろ」

と大声をあげ、一番に櫛で冷酒をきゅうっとやりだした。

ちようどその時、表の道が急にさわがしくなり、

「居たぞっ」

と叫ぶ声がし、表を数人の男達が駆抜けていった。

それで三造たちが、居酒屋を飛びだし、そのあとを追った。つい五十米ばかり先で、月明りの夜道を白刃をきらめかせながら五、六人の連中が、どっと一人の男をとりかこんだところである。そこへたちまち三造は駆けつけ、

「この野郎か」

と輪の中へ入った。

輪の中には、着流し、絞り染めの帯に新しい雪駄をつっかけた、すらりとした若い苦味走った顔の男が、凝っと立っていた。

「この野郎か、山次というのは？」

三造がもう一度大木の若い者に声をかけたが、生憎、賭場荒しを見た者がいない。

「若旦那はどうした」

「いまの勘定を払っているンで」

信次郎はその時ちようど居酒屋を出たばかりだったが、昂った三造は気がはやり、信次郎が来るのを待ちきれなかった。

一步、男のほうに出て、おうと顎をしゃくった。

「おめえ、名ぐれえあんだろう」

男は別におびえも怒りもしなかった。

ゆっくり苦笑いした。

「ありますよ」

三造、いなされて、かっとなった。

「な、な、名乗れってんだ」

男はちよいと憎い間をおいた。

男の声は低いが貫目十分だった。

「わたし、不動の龍太郎、関東、前田一家の、若い者んです」

前田一家といえ、東京北部から大宮、高崎、桐生、足利へかけて、傘下十数団体、日本一のすじもので聞えている。

大木の若い者は、その名でざわめき、思わずおびえてあとずさりする男もあったが、三造は運がわるかった。いましがた櫛でひっかけた酒の酔いが、その時、五体にあふれ、ときのいきおいを抑えかねた。それについて三年ばかり前にはじめた運輸会社があったり、金がたまって気も大きくなっている。

あたりの連中がおじけづいたのが、かえって三造に虚勢をかきたてた。

ここは東京じゃねえ浜松だ。

「こんな夜中に、な、なにしていやがったんだ」

なにをしようが大きなお世話である。

不動はじろりと三造の面を見た。

三ッ下あつかいにされて、三造、ますますひっこみがつかなくなった。

「この野郎、でけえ面しやがって」

腕っ節には自信がある。

いきなり三造は、太く逞しい腕をのばして、龍太郎の胸ぐらをつかもうとした。

見たところ、すらりとした男で、そう強そうにもない。たかをくくっていたのだが、襟に手が触らぬうちに、三造は、ぎゅっと、伸した腕を後手にねじりあげられた。

「あいてて、痛え、なにしやがる」

不動はそこで漸く重い口をきいた。

「てめえ、こう、堅気の方にも、因縁つけてるンだろう」

「痛えっ、放せ、この野郎」

さわぐところを強く突き放され、三造はつんのめり、夜道へはいつくばった。

まるで子供あつかいである。

しかし三造も、一家を構えるほどだから、足りないなりに抜け目がない。よろよろ立ちあがるふりをして、龍太郎の隙をうかがい、ぱっと抜打ちに斬りつけた。

うわつと若い者等が、無暴におどろいて大声をあげた。もし怪我でもさせたら、あとのたたりがおそろしい。

案じるほどのことはない。

不動はひらりと体をかわして、また三造の利き腕をつかんだ。のめってくる三造のみぞおちのあたりを、膝頭で蹴りあげた。

「げえっ」

どすんと三造は仰向けにぶっ倒された。なに糞つとばかり三造は、はね起きたが、そこをどつと子分たちに抱きつかれ、抑えつけられてしまった。

「申しわけねえ、兄さん、酔うとわからなくなってしまふもんで」

三造を抑えつけた一人が、片手で龍太郎を拜んで詫びた。

詫びてすむようなことではない。

不動は、しかしそのところを、すっと乗り越えた。

不動、幽かに微笑した。

重たい口をひらいた。

「気にやしませんよ」

そしてそのまま、なにごともなかったように、閑かな夜道を立ち去っていった。

その一部始終を、少し離れた軒下から、信次郎は茫然とただ眺めていた。

三造はこの浜松では、勢五郎と並んで、乱暴者で知られている。その三造を手もなくひねった男の腕にも、信次郎はおどろいた。そのうえ三造の乱暴のあと、信次郎は、

へこれはただではすまないぞ

どうなることかと、はらはらしたのに、男はそれを忍んで、氣がるく許したではないか。

それが信次郎のあさはかな期待を裏切り、痺れるほどの愕きを与えた。

こんな大きな岩のような性根の男を見るのは、信次郎、生れてはじめてだった。

これがやくざというものなんだ、こんな男が、東京にはざらにいるンだらうか――

やがて三造が落着をとりもどし、また夜道を二人組を探し求めて、信次郎も駆けずりまわった。

暁方ちかくなり、信次郎は、東助から、

「若旦那、御苦勞さんでした。どうせ野郎たちは袋の鼠ですからね。明日のことにしますよ。引き

とって下せえ」

と礼をいわれ、漸く家にもどって来たのだが、不動に受けた愕きがひどくなまなましく残っていて、なかなか眠りに落ちこめなかった。

ここいらあたりのやくざは、ケチな野郎ばかりだ。

あんな男になれるだろうか。

信次郎、年は廿歳、家は大きな造り酒屋で、金の苦勞も人の世の苦勞もまるで知らない。夜半のひそかなやくざへのあこがれは、むしろ青春の息吹に近い。

やがて胸一杯の希望であどけなく若い信次郎は眠りに落ちていった。

時は昭和六年七月七日未明、満州事変直前の頃のことである。

「お客さん、早起きなんだね」

小ぶとりの赤い襷をかけた宿の年増の女中が、おはちの上にお膳をのせ、にぎやかな調子で、部屋へ入ってきた。きれいな目をしている。

出窓に腰をかけ、青い空の雲の峰、庭の青葉や窓ぎわの向日葵を眺めていた、黒い単衣のつむぎの龍太郎は、胸の中でにが笑いをした。ふりの客だし、着くのも遅かったので、台所の近くの部屋へ入れられた。田舎の人は朝が早い。一番鶏が鳴くともう起きだし、がたごと働きます。この年増の丸ぼちゃの陽気なねえさんなんか、大声で土地の民謡なんかをうたっていた。やかましくて、とても寝てはいられなくて、龍太郎は起きだしてしまったのである。